さよなら花火

でりでり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さよなら花火

【Nコード】

N5182N

【作者名】

でりでり

【あらすじ】

肝試しに向かった墓場で出会った幽霊の少女と一緒にお祭りに行くことになった少年。

少女の失われた記憶を取り戻そうとするが……。

彼女との出会いは一週間程前に、友人らと神社裏のお墓で肝試しをしたときだった。

親がお金持ちなので俗に言うお坊ちゃん暮らしをしている僕だから、屋敷の者がこんなこととして遊んでいると知れば血相を変えて飛んできらるだろう。

なにせあの墓には女の子のお化けが出るという噂があるのだから。僕と友人はそんな話あるわけないと笑いながら、それを検証するついでに肝試しを始めたのだ。

油性ペンで名前を書いた石をもって十時半過ぎに神社に僕含め五人で集まり、そこから一人ずつ懐中電灯を持って墓場の奥の方にある地蔵の側に石を置く、至って簡単な遊びだ。そして僕が石を置きに行く順番は五番目、つまり最後である。

先に戻って来た他の皆は幽霊なんていなかった。と、不服そうにしていたので僕もやはりそんなものかと思い、スタートを切った。

大中小、古いの新しいのが多種多様に混ざった墓石だらけの墓場は、それは確かに一人ぼっちで行くには怖いのもある。

何か変な影が見えるとドキツとするが、懐中電灯で照らすと大概はしようもないもので、まあ肝試しなんてこんなものかとそれなりに楽しんでいると指定されていた地蔵の前に着いた。

スタートしてちよつとしてから一度曲がれば後は一本道なので暗くてもまだ小学三年生の僕でさえ簡単にたどり着けた。

他の友達に倣って地蔵の前に石を置こうとしたとき、地蔵の向こうにまた影が現れた。

一瞬ひやりとしたが、またどうせしようもないものだろうと思つて懐中電灯をその物影に当ててみたら、白地に赤の模様がたくさん入った着物を着ている14歳くらいのショートカットの女の子がそこにいた。

「……」

「……」

僕も彼女も互いに驚き戸惑いを隠せなかった。

「えーと……、わー！」

彼女は何をとち狂ったのか急に両手をあげて襲つちやうぞ表明をしているが、怖いどころかとても可愛いらしかった。

「こほん。さつきから気になってたけど君たち何してたの？」

彼女は手を下ろして咳払いをしてから尋ねる。

「……肝試し」

知らない人とは話をするなと口酸っぱく言われていたがこの娘とならいい気がした。

「なるほどね。だから石を置いてたんだあ」

彼女は優しく微笑みながら僕の隣へやってきた。それを見て可愛いと同時に綺麗だなと思った。思えばこれが恋だったのかもしれない。

僕の隣で石を一個一個見ている彼女に、何をしてたの？ と尋ねようとしたとき、とんでもないことに気がついた。

この娘、足が、具体的には足首より下が……ない。

人は本当に恐怖したとき叫び声なんて出ないらしい。腕の力が一気に抜け、右手に握っていた懐中電灯を落としてしまう。

「んっ、どうしたの？」

どうしたのじゃないよ本当に幽霊がいたよどうしよう逃げたいでも身体が動かない僕どうなっちゃうの怖いよ。

懐中電灯を落として彼女の顔が見えなくなつたためどんな顔をしてるかわからない。もしかしたら口が裂けるほど笑っているかもしれない。

彼女は懐中電灯を拾い、それで顎から光をあてて「みいたあなあ」と声を作ってきた。

「ひいっ！」

ようやっと呼び声が出せた。我ながら情けないにも程がある。身

体の膠着が解けたらしくそのまま勢いで尻餅をつく。痛かった。

しかし彼女はあはははと笑っただけであって、僕をとって食うようなことはしなかった。

「なんか驚かしてごめんねー。大丈夫？」

「……」

彼女は尻餅をついている僕に手をそつと差し伸べた。手もすり抜けるんじゃないかと思ったが、その手は触れる上に普通の体温をもっていた。幽霊ってこんなものなのか、自分の知識の幽霊とはどうやら差違があるようだ。

「はい、懐中電灯」

「ありがとう。……君は」

「うん、死んじやってるみたいだね」

なぜそんな笑いながら言う。

「……大丈夫なの？」

言っただけから自分でも何が大丈夫なんだよと突っ込みたくなった。

しかし、彼女は怒ることも変な顔もせず笑っていてくれた。

「わたし？ まあ大丈夫とは言えないんじゃない？ 死んじやってるし」

「そ、そうだよ。ところでなんで死んだの？」

初めて彼女が暗い表情を見せたのでしまったと思った。

「……。ごめん、わかんないの。でもお祭りのときに死んだ気がするの。死ぬ前のことは覚えてなくて」

「浴衣着てるもんね」

「あの、お願いがあるの！」

すると彼女は急に涙目で嘆願してきた。断れるわけがない。

「一緒に来週のお祭りに行ってくれない？ わたし、そしたら何か思い出せそうな気がするの」

「うん」

なぜなら……。まあ、やはり、好きになってたかもしれないからだろうか。

僕だってまだ小さいけど男である。やっぱり彼女に恋をしているのかもしれない。四六時中彼女のことしか考えれず、何事にも上の空だった。相手が幽霊だったとしても、そんなものは僕には関係なかった。今の僕ならその気になれば大男さえ倒せそうな気がした。そして念願のお祭り当日。

彼女とは前に会った地蔵の前で待ち合わせていた。相変わらずの浴衣姿と微笑みで僕を待っていてくれたようだ。

「さ、行く?」

可愛らしく首をかしげて手を伸ばしてくれた。その手をしっかりと握ると祭りで賑わっている町へと二人して歩き出した。

「わあ!」

ようやく祭りの会場にたどり着くと、様々な人が様々な服装で、様々な表情を浮かべていた。

彼女はそんなたくさんいる人の中でもとりわけ一番の笑顔でいた。

「なんか懐かしいよ」

もう既に涙目の彼女。繋いでいる彼女の腕をぎゅっと強く握ると彼女は我に帰った。

「あつ、ごめんね」

「何か思い出したの?」

「うーん、思い出せそうなんだけど」

「まあゆっくり考えなよ」

「うん……」

しょんぼりとしてる彼女はなんだか見てるのが辛かった。話を変えるべきだ。

「たこ焼き食べる?」

幽霊が食べるかは知らないけど触れるなら食べれそうだろう。

「えっ?」

「僕おごるよ」

小三がませた真似を。と思われるかもしれないが、冒頭でチラと触れた通り一応金持ちの息子なのでお金だけはあった。

彼女が何か言う前に、たこ焼き屋台のおっちゃんにたこ焼きを頼んだ。

「僕、お金だけはあるから。はい」

「それじゃあお言葉に甘えて……。ありがとう！」

「他にも何か欲しいものとかしたいこととかあったら言ってね」

「うん」

ああ、その笑顔がもつとみたいなあ。たこ焼きを頬張る彼女も素敵で見てるこちらもつられて笑顔になる。

「君の家お金持ちなの？」

「親が実業家なんだ」

たこ焼きを食べ終えた僕らは祭りの雑踏の中特に目標もなくぶらつき出した。

「へえ、すごいね！ お金持ち憧れるよ！」

「っていうことはお金持ちじゃなかったんだ」

「おお、なるほど！ 確かに！ なんか君といるといろいろ思い出せそうね」

途中で金魚すくいもやった。射的も、輪投げもやって、あとはたまごせんべいも食べた。

彼女は僕の身の上話、たとえば学校の話とかをよく聞いてくれて、とても楽しそうにしていた。

友人にも幸い会わずに済んだし、彼女の足首より下がらないことにも誰も気づかれなかったみたいだ。順風満帆。

「ねえ、さつき家がお金持ちと言ってたよね」

「それがどうしたの？」

「お宝とかあるの？」

「なんでお宝なの？」

「えっ、いやあ。だってお金持ちってそんなの持ってそうないメー

ジなんだけどなあ」

……言っちゃダメってお父さんには言われてるけど彼女になら。

「あるよ」

「へー！ やっぱり！ どのなの？」

「なんとか、っていう綺麗な大きい宝石の指輪なんだ」

「お父さんとかが付けてるの？」

「ううん、強化ガラスの箱に入れて家の中で飾ってる」

「泥棒とか来ないの？」

「昼は警備員がいるし、夜は赤外線で誰かが来たら分かるようになってるし、鍵を使わずガラスもちよつとした振動を感知したらブザーがなるようにしてるから泥棒なんて怖くないよ」

「すごいねえ」

「しかも鍵は指紋認証なんだ。僕の両親が僕じゃないと絶対に開けられないの」

「すごいね！ あ、あの綿菓子一緒に食べない？」

「いいね」

そこからまだ楽しい時間は続いた。スマートボールもやった。他にも河原に言ってお祭り名物の特大打ち上げ花火だっって一緒に見に行っただ。

しかし花火を見ているとき急に彼女の顔が曇った。

「どうしたの？」

だが答えることはなく彼女の体は震えるだけであった。そしてこの祭りの花火大会自慢の特大花火が開く轟音が鳴り響くと同時だった。

「きゃあああああああ！」

彼女は悲鳴を上げてその場でうずくまった。流石に周りの人も怪訝な顔をしたが、そんなのには構わず僕は本能的に彼女の腕を掴んで河原から駆け出した。

彼女は何も言わずに僕の行動に準じて着いてきてくれた。気付けば神社の境内まで戻っていたようだ。

休みなく走ったせいで僕も彼女も息が切れていた。彼女の浴衣も多少崩れている。

しかしそんなことよりも彼女の青い表情だ。

「大丈夫」

「思い出したわ……。わたし」

「……」

「あの花火」

「花火が？」

「たぶん五年前くらい、あの花火がわたしの方目掛けて飛んできたの」

「飛んできたって……」

「お父さんが花火職人でね、わたしもお父さんの側で花火を上げるのを見てたのよ」

「そしたら失敗して、か……」

「うん」

彼女は吐き出したい物を全て出しきったのか再び笑顔に戻っていた。儚く消えそうなものだった。

「今日は楽しかったよ？ お陰で満足出来た。もう思い残したこともないしね」

「えっ」

ということはもしかして……。どうしたら彼女を止めることが出来るのだろう。僕は彼女ともっといたい。でもそれは僕の自分勝手なものかもしれない。彼女の本当の幸せは……。

「ね、目を閉じて？」

「え？」

「いいからいいから」

訳も分からず目を閉じると、柔らかく、暖かいものが僕の頬に触れた。僕だつてわかる。キスだ。

嬉しくて、優しく、でも切ない。

唇が僕の頬から離れた。僕は胸が高鳴っていてドキドキしていた

からまだ目が開けられない。

「本当にありがとう。このことは絶対忘れないよ……」

彼女の声が耳元でそっと聞こえた。まるで風のように耳を通り抜けて消え去った。

そっと目を開くと、もう境内には誰もいなかった。最初から叶わないと思っていた恋だったけど、そこから大事な何かを学べた気がする。

遠くで咲く花火を見ると笑っている彼女が見えた気がした。

「お疲れ様」

「ふう」

境内から離れたところで少女がボディースーツを着た男の元に駆け寄る。

少女は浴衣を脱ぎ捨てると男があらかじめ用意していたボディースーツに着替え直す。

「まさかここまで上手く行くとは思わなかったわ」

「部分ステルス装置で足だけ透けさせて幽霊にする。子供にはインパクトたっぷりさ」

「触れる時点で疑問に思われるかと思ったわ」

「子供の方が案外現実を受け止めるもんだよ」

「……」

少女は先程まで一緒にいた少年を思い出して複雑な表情を浮かべた。

「それにしても思ったより喋ってくれてこちらとしても好都合だったな」

「まったくね」

「さて、仕事をしにいくか」

「指紋認証のキーもあの子の指紋をこっそり取ったから大丈夫よ」

「ああ。今回の獲物は大きいぞ！ その分盗む価値があるってところだ！ 行くぞ！」

二つの影は闇の街を走り抜ける。今回も華麗に颯爽と宝を盗むことが出来るのか。少女は不敵な笑みを浮かべるのであった。

(後書き)

急に怪盗モノに切り換える発想だけは好き

しかし、あまりにも分かりやすすぎな会話で展開読みまくりんぐ。
宝の在処についての会話は丸削りしても良かったんじゃないかな
確かにこれ作者基準で書きすぎてめちゃくちゃ不自然

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5182n/>

さよなら花火

2010年10月8日14時28分発行